

オリエンタルクルーズ日誌

(二〇一八年二月八日〜二十八日)

佐怒賀正美

■二月八日(木)

朝九時に他の二人の講師と成田空港第二ターミナルで待ち合わせ。講師紹介エージェントの山岸はるみさんとも三年ぶりの再会。今回御一緒する講師は、将棋の関口勝男さん(日本将棋連盟棋士七段)、コーラス教室の竹村淳さん(バリトン歌手・横浜シティオペラ理事)のお二人。

今回は、マレーシアのクアラルンプールまで飛行機で行き、そこに一泊、翌日ポートケランから大型客船に乗り、インドネシア、フィリピンを経由して、神戸、横浜へと戻る三週間の旅になる。私はその洋上で九十分の俳句教室を十回開くことになっている。もちろんアジアの常夏の旅は初めてなので楽しみも大きい。

十一時五分、JAL七二三便で成田からクアラルンプール



目ざして出発。どこで魔法が働いたのか、離陸が一時間ほど遅れたにもかかわらず着陸はほぼ定刻通り。到着する三十分ほど前になって、実は隣席の女性も同行の講師であることが分かってびっくり。顔ヨガ教室の篠原もとこさん(顔ヨガインストラクター)であった。すなわち、ここからは四人家族的な行動となる。

クアラルンプールに十七時過ぎに着くと、さほど暑くはないが湿度が多い。空港の中で多少戸惑ったものの、ファミリー行動の強みで無事入国。お迎えのバスで市内のホテルへ向かう。車中にて、今回インドネシアについて講演をされるバンバ

ン・ルディアント先生（慶応大非常勤講師・和光大学教授）とも一緒になる。一人また一人と仲間が増える道中は「桃太郎」みたいだ。一時間

ほどの道中、現地のツアーガイドの説明を聞きながら、すでに夜の帳の降りた街並みを眺める。



空港のあたりは、昔

はいちめん油椰子の森

であった。その真ん中に空港を作った。ゆえに、いまでも森の名残が空港を取り巻き、バスはその中を突っ切って、市街へと向かう。油椰子は大きな葉がバサバサと逞しく野性的だ。南国に来たという実感が湧く。ガイドさんによれば、クアラ Lumpur の「クアラ」は河口、「Lumpur」は汚いという意味だそう。市中で二つのが合流しているが、昔、錫が採掘され、それを運ぶ多くの船によって川が汚れたことにちなむらしい。

油椰子の葉は悪魔など追ひ返す 着陸に湧くまぼろしの椰子の森

一時間ほどでホテル・イスタナに着く。中国風の広やかな空間を感じる現代的なホテルだ。部屋もスイートルーム並み

の広さで設備も整っている。チップの小銭を作ろうと思いいち、一階のレストランでステーキサンドとコーヒーを注文する。ここに来る客は多宗教の国らしく、中国系の人、イスラームの人、仏教徒など様々。皆、自然に共生しているように感じられた。あとから竹村さんも降りてきて、ホットドッグを頼む。こちらも二人分ほどのジャンボサイズでポテトフライ付き。でも、店員たちは気さくで、和やかな雰囲気だった。

■二月九日（金）

朝九時、市内のホテルからポートケランへバスで一時間ほど移動し、船着き場からクルーズ船に乗り込む。船は三年前に乗った「ばしふいっくびいなす」だ。何よりも懐しい。あの時は南アフリカから大西洋を渡りブラジル、アルゼンチンまでの大航海だった。私の部屋は前回は五階で丸窓だったが、今回は八階で四角窓。コンパクトなワンルームで、海が見える。



出港まで半日ほど、出国審査室のあるターミナルの周りを散策し、トロピカルな空気をたっぷりと吸いながら、鮮やかな色の花や樹木をスマホで撮り、LINEで日本の家

族へ送る。花の名前は後日調べることにしよう。

船旅のとは口ハイビスカスが迎ふ

夕方出港。十九時三十分夕食。他の講師やエンターテイナーたちと食卓を囲む。ここで、新しく山上昌弘さん（日本ドリンク協会代表・ジャパンソムリエ協会代表）に出合う。むかし長女が専門学校でカフェコースの授業を受けた先生でもあった。そのことをお伝えし、十五年後の奇遇を互いに喜ぶ。また、デジカメ活用術講座の木村聡さん（写真家・フォトジャーナリスト）に再会。こちらは三年前のクルーズで一緒にさせていただいた。航海の記録写真を「ぱしふいづくびいなす」のサイトに載せている。

夜十時から翌朝六時まで、マラッカ海峡の海賊対策のため、甲板から客室への出入口はすべて閉鎖された。もちろん何事も起こらなかったが、他人事であれば「海賊」を一度くらいは見てみたいものだ。もちろん、私と違って泳ぎは達者に違いない。でも、カリビアンパイルーツのような勇壮な出で立ちではなく、小柄で刀を背に背負い大亀にでも乗って巧みに船に近づくような、忍者よろしき海賊像が浮かんでしまうのはなぜか。ふと、マラッカや蟹は万歳して泳ぐ 寺澤一雄を思い出した。

海賊の凱歌は遠く暑にけむる

大亀と減るマラッカの海賊は

■二月十日（土）

朝六時起床、七時三十分朝食。十時から十一時三十分まで第一回の「俳句教室」を開く。会場はシアタールーム。階段教室風で窓はないが、ゆったり感はある。他の講座も複数開設されていたせいか受講者は少なく十五名。俳句の三つの要素である季語・定型・切れについて優しく説明する。テキストはこの三年間学生に教えてきた自家製のものだ。俳句を各自二句ずつ、本日十六時までに受付脇の投句箱に提出することを宿題にした。

午後は、下着類を手洗いし、八階のデッキをゆつくり歩く。船の片陰もなかなか趣深いものだ。救命用具以外ほとんど余分なものはない。海原にも何もない。無形の中に虚実緞い交ぜの多くの人間の記憶が積まれていくのだ。一方通行のデッキ散策は、片側は波に沿って涼しく進み、反対側は波に立ち向かいながら灼熱の日差しを進む。陰と陽、こんなところにも両義性の世界が展開する。この陰と日向のデッキを巡りながら記憶と共に次第に日焼していく。

陰陽のデッキを巡り日焼せる

夕食を済ませると、やがて赤道祭が船内で催された。赤道を渡るにあたって、船長が海神（ネプチューン）から通行許可証と鍵をもらう儀式だが、笑劇風な仕立てである。舞台の

上で寸劇を演じるのは船長はじめ乗組員スタッフたち。日頃の練習が実って、どんだん笑いを取る。最後に船長たちが歌で海神たちをもてなし、無事に赤道通行証と鍵を受け取った。「船長、沖に赤い道が見えます！」と副船長が告げると、ホールに張り渡された赤い紐が観客席の頭上を後方から前方へと移動する。赤道

**赤道へクルーズ船と向き直る
神讚へ赤道ひらき越えゆけり**

■二月十一日（日）

日本は建国記念日。朝はどんよりしていたが、日中は快晴。海の緑が艶々として美しい。この南海の波は太古から魚たちを育てながら熟れてきた。この緑色には、すでに絶滅した生物や南瞑に沈んだ人たちの無数の命も混ざっているのだ。大蛇や鯨や鮫や人間などの骨や血肉も熟れ合った命の海。デッキで眺めていると、自分の身も心も緑色に染まりそうだ。へし



んしんと肺碧きまで海の旅（篠原鳳作）を思い出す。

生も死もこなれ合ひたる海の碧

俳句教室二日目。投句作品の講評と、季語と歳時記の話が中心。虚子の「熱帯季題」を紹介する。私自身は必ずしも熱心な虚子崇拜ではないが、虚子の思い切った実験を痛快に思うことがある。熱帯季題を消してしまったのはもったいない限りで、運用性のあるものは復活させたい、とデッキを散策し船室で句作を試みる。

午後、昼寝をしてからデッキを七周する。船の片陰に入ると涼しく、沖合を眺める心のゆとりが生まれる。すこしうねりの見える波たちが、我先にとこぞって赤道を越えていく。デッキには救命艇、救命筏、救命浮輪、救命ロープなど、さまざまなものが備わっている。万が一の時の備えだが、出番のないままに南国の太陽に灼かれスコールに耐えているのは、健気にさえ思える。

赤道を越ゆるに挙る鯨波かな

■二月十二日（月）

船は朝セマラン（インドネシア）に入港、その夜出港。今日は講座がないので、ボロブドゥール寺院遺跡へのツアーに参加した。「ボロ」は丘の意、「ブドゥール」は寺の意と聞く。オーバーランディングの客も含め約百八十名の参加があり、

バスは六台。先頭と後尾に朱色のパトカーが付き、「そのけ
そのけ」と他の車をどかしてくれる。特に渋滞時の威力は
すごい。お成りバス扱いと言ったらよいか。他の車には気の
毒だが、おかげですいすいと目的地に着いた。バスの中で
WIFIが使えたので、東京の家族にLINEで写真やメッセ
ージを送った。

先導は真赤なパトカー 椰子の道

さて、バスはジャワ島を北から南へ縦断する。山がちだが、
その間に田畑がひろがる風景は日本を思わせる。だが、ここ
は二期作か三期作。片方で稲刈が行われ、その隣では田植が
始まっていた。日本と違うのは、それらが椰子の木の並木越
しに見渡せることだ。一方、都市部では工業用地下水の汲上
げによる地盤沈下が深刻だ。出発の時も洪水後のような水浸
しの風景が散見された。途中、トイレ休憩のときに振舞われ
た濃厚なインドネシア珈琲が旨かった。

椰子の実の見守る田植始まりぬ

椰子の実を抱へて沈下せし地盤

隣りしてジャワの田植と稲刈と

バスは遺跡近くのホテルに着き、舞台が設えてある外庭で
ピュッフェ形式の昼食をとる。周囲には六台の巨大扇風機が
ミストを吐き出しながら猛然と回っている。その風の圏内に
入れば涼しいが、はみ出して散策しようとする汗が滲み出



てくる。いかにも多湿な
雨季の熱帯だ。

ボロブドゥールは壮大
な仏教の石造建築物で、
シャイレンドラ王朝時
代の八、九世紀頃に五十
年かけて造られたが、そ
のあと千年以上密林と火
山灰に埋もれていたそう
だ。一八一四年にシンガ
ポールの創設者でもある
ラッフルズらによって発
見されたとのこと。その
長い間の眠りを思わせる深々とした石の陰影が荘厳な寺院遺
跡に仕立てている。密林の中でスコールを何万回も浴びた事
であろう。石にはその雨
の色が深く染みわたって
いる。

この遺跡は巨大な城砦
を思わせる。最下層の煩
悩の世界から最上層の無
の世界を象徴する大スト



ウーパまで十層あり、下の五層には露天回廊と壁面彫刻がある。回廊には仏教の説話が約千五百面のレリーフで語られていて見飽きない。また、外側の石窟（壁龕）には釈迦仏が約五百体置かれている。広場には大きな赤蜻蛉が飛び交っていた。思い切って頂上まで登ったが、下界の森を見渡しているうちに遠雷を聴く。まもなくスコールが近づいてきた。急いで下りてホテルに駆け込んだところで、スコールに追い付かれた。

仏陀五百護る大仏塔にスコール 大仏塔に密林の香のスコール来

■二月十三日（月）

午前中、第三回目の講座。定型と写生（客観写生と主観写生）の話をする。

夜、バンバン先生の企画されたバリ舞踊のショーが船内で行われた。サンガル・タリ・ダナ・スアラ舞踊団により、「ラッサム王物語」の一部を舞踊化したレゴンダンスなどが披露された。衣装の絢爛なこと。指先まで細かくしなやかに動かしながら、膝を折り中腰で続けられる舞は、素早く動かしては止める目の表情も独特で惹き込まれる。次第にバリの歌舞伎のようにも感じられてくる。

夜涼なりバリの舞踏の姉いもと

やんまの目動くはバリ舞踏の目

夜、バリで下船する予定の山上さんから飲料や食料など船上生活で買い込んでおかれたものを置き土産にたくさんいただく。ココナツ蒸留酒（スリランカ）、ラム酒（タイ）、缶ビール（タイ）、チャイの濃縮液（スリランカ）、クッキー（スリランカ）、シロップ（スリランカ）、そしてなぜか黒霧島（芋焼酎）。研究対象とは言え、よくぞたくさん買われたものだ。

■二月十四日（火）

バリに入港。バリは雨季の終りの頃、さつそく烈しいスコールを体験する。今日は講座のない日なので講師仲間と島内を動くことにした。昨日、バンバン先生を介してタクシーを安くチャーターできたので、竹村さん、篠原さんと一日観光に出る。三人でほぼ六千円。運転手は出羽三山ことデワサンさん。昨夜の舞踊団の知人なので安心、すこし日本語と英語が話せる。

出発時からスコール二回。先年ニュースに報じられていた北部のバトゥール山（一七一七メートル）の噴火は、ここまでは影響しなかったという。街を進むと、小さな盆に乗せた花や食物を捧げている姿にしばしば出合う。捧げる場所は玄関前や、辻に立つ神像の足元など。天界の神、下界の神（鬼神）とに捧げ分けられている、とも言われる。バリはヒンドゥー

教に、バリ独自の精霊信仰が結びついたバリ・ヒンドゥーが主流の島でもある。

朝涼や辻の女神に饌ささぐ

ウブドというお目当ての町に着いたのがお昼近くだったので、まずはレストランで腹拵え。青々とした稲田の広がりを眼前にししながら、du

crispy (ダックの唐揚げ)の定食をいただく。なかなかの美味。ここでも畦の所々に椰子の木が植えられている。畦道を歩くと、アメンボ、蝶、燕などに合えた。田んぼの入口に大きな女神の像が立っていた。そして、観光客へのサービスなのか、地元の慣いなのか、多くの動物や獣神の石像が飾られていた。



女身仏の影あめんぼに及びたる 暑に伸ばす鉄束子めく巨舌かな

食事後、ウブドの北方八キロにあるテガラランの棚田（ラ イステラス）を見に行く。谷を挟んだ石垣なしの大きな棚田だが、周囲は鬱蒼とした熱帯雨林。棚田の中にも椰子の木が

点在する。バリ島一の美しさと言われるのが納得される。あちこち燕が勢いよく飛び回っていた。

大棚田はみ出すバリのつばくらめ

次に、顔ヨガ講師の篠原さんがバリのヨガを体験してみたと言いつつ、ウブドの町の YOGA BARN というヨガスタジオに立ち寄る。それは幾曲りした洒落た小路の奥にあった。広い敷地にスタジオ棟がいくつか建ち、中庭は南国風でくつろ



いだ気分になれる。中庭に面したカフェのテラスで読書している人、瞑想に浸っている人など様々だ。欧米人の観光客も多い。敷地には仏像や神獣などの像があちこちに置かれエスニックが強調されているようにも感じる。

バリ珈琲賞でつつヨガの終り待つ

ヨガのポーズなるや女神も神獣も

とここで、竹村さん、デワサンさんと私の男たち三人組は、ヨガ教室に飛込み参加する勇氣はなく、近くのカフェで珈琲を飲みながらゆっくりとヨガの終了を待った。

夕暮れにプナタラン・サシ寺院に立ち寄る。この寺院は、



ウブドの北東ペジェン村にあり、バリ六大寺院の一つ。古代神話「ペジェンの月」の伝説が残るそう。夕方ですでに門は閉まっていたが、他のグループツアーのガイドさんが少しだけ

開けて入れてくれた。友人たちと境内を眺めて写真を撮る。彫刻も独特の神獣のようで興味は尽きない。独特の赤煉瓦色のヒンドゥー寺院も、黄昏に溶け合い、しっとりとした陰影と共になかなかの趣がある。

汗の首回しぬ神獣の死角

ところで、運転手のデワサンさんが道中しばしば「ハウス・テンプル」と口にする。説明によれば、どの家にも仏壇のようなものがあるが、裕福な家になるとまるで寺院のような豪華なものを作るのだそう。いわゆる「屋敷寺」だが、知らなければ小さな寺院と見紛う。元来、インド起源のヒンドゥー教はシヴァ、ブラフマ、ヴィシュヌの三大神が最高位だが、バリ・ヒンドゥー教では三大神の上にさらに最高神のサンヒヤン・ウイディを置くそう。バリ独自のヒンドゥー教とし

て生活になじんでいるのだろう。

神の上に神ありバリの日雷

夜八時前、夕食の時間ぎりぎりに戻り、皆で船へと急ぐ。竹村さんが突然軽々と走り始めたのには、思わず篠原さんと顔を見合わせた。さすがにトレーニングを欠かさない筋肉質の男子だ。一方、バリから乗船の茶道の原宗芳先生（裏千家教授）が到着されていて、一緒に食卓を囲む。原先生歓迎を祝して、将棋の関口先生の日本酒も今夜は三本と楽しそう。お二人とも十年近く乗っておられるとの由。飾らぬ話が行き交うのも気持ちよい。

南海の夜涼の卓に棋士・茶人

その後、岸壁でケチャ舞踊のパフォーマンスがあった。ラーマーヤナ抒情詩をもとにした舞踏と言われるが、半裸の男たちの合唱群舞とでも言おうか。伴奏の楽器はなく、代わりに自分たちで声を出してリズムを作る。「チャ」の掛声がいくつかのパートに分かれ、細かな重層的なリズムを作り出す。篝火を真ん中にして、群舞が巨花のようにひらき、その中で数名の主人公たちが舞踏劇を披露する。八階のデッキから眺めていたが、風が強くなってきたので早めに部屋に戻った。

熱帯に刻み継ぐ声ケチャ群舞

■二月十五日（水）



バリ二日目。午前中、バスツアーでバロン舞踊を見に行く。南国風の広やかな吹き抜けの舞台での、ガムランの伴奏にのった物語性の強い舞踏である。バロンは森に棲む聖獣だそ

うだ。この日は、マハーバーラタ叙事詩から脚色された舞踊を見る。バロンは善の象徴として登場。悪の象徴であるランダと、出たり入ったりしながら戦いを続けるが、決着はつかない。人間には善と悪が棲みつき、永遠に戦い続ける。それがヒンドゥーの世界観らしい。それにしても獅子舞の獅子に似るバロンの顔は、大きなくくりくり眼玉と白い牙とともに、限りなく愛苦しい。劇が終わると、バロンとの撮影タイムが長々と続いた。

聖獣悪魔バリに舞ふなり眺なる 聖獣の暴れずに舞ひ暑をもどる

そのあとインドネシア語でバティックと呼ばれる蠟纈（ろうけつ）染を見学に行く。入口の屋根の下で手描きのバティックの作業を見させている。七、八人の女性が熱く溶かした蠟を筆に漬けて、それぞれバリの事物や風景、あるいは伝統的



に漂う。その奥に接した大きな平屋建ての部屋の中には、土産の蠟纈染めの色彩豊かな衣服がたくさん展示されていた。

スコールやバリ蠟纈の蠟にほふ

夕食時に、一昨日山上先生からいただいた置き土産のアルコール類を仲間で分けた。夜は佐々木秀実さんのたつぷりとした声量の「ドラマティックな」シャンソンを堪能する。

■二月十六日（金）

今日は一日の休日。船はコモド島の沖合に停泊。ツアー客は通船を使って島に上陸し、小一時間ほどのコモドドラゴン観察の散策をして戻ってくるが、講師やエンターテイナーは船内にとどまることになった。珍しいコモド大トカゲを傍で見たかったのに残念。でも、我々は仕事で乗ったのだから仕方ない。聞くところによると、コモドドラゴンは全長三メー

トルもあり、子ドラゴンもいるらしい。コモドドラゴン、コモドドラゴン、とあれこれ想像しながらデッキから島を眺めていると、左右に伸びる島全体が大トカゲに見えてくる。コモドドラゴンの一番の好物は「もちろん大きな夕焼さ」と勝手に私は決め込んでいる。

コモドドラゴン大夕焼を更新す

夜は夕食後、トランプマンこと中島弘幸さんのマジックショーを楽しむ。中島さんは、演技のときは宇宙防衛軍の衣装をまとって引き締まった顔をしているが、食事のときには魔法が解かれたかのように、グラス片手に全く別人の柔らかな表情になる。

夜涼なりおのれの使命解く魔法

■二月十七日（土）

朝食のときカメラマンの木村さんと同席だったので、昨日のコモドドラゴンの話を聞く。島には体長二、三メートルのドラゴンが六匹もいた。しかも、ツアー客たちを撮影していると、後ろから近づいてきたものがいた。気付いた客の声で難を逃れたが、一瞬肝を冷やしたとのこと。夜行性ながらも動きがなかなか素早く、低い声で呻くように鳴くらしい。島には鹿も棲んでいて、それがドラゴンの餌になる。島には二千九百匹のコモドドラゴンと、三千人弱の住人が共生してい

るとのこと。一人一台の車ではなく、一人一匹のドラゴン比率だ。

大蜥蜴去りけり椰子の実が落ちる

さて、俳句の教室は第四回目。今日は、省略について、特に主語の省略をゆつくりと解説する。受講者は十名ほどで定着しそうだ。文挾夫佐恵さんの作品を二十句ほど紹介して、この日の講座を締めた。へ凌霄花のうぜんのほたほたほたりほたえ死文挾夫佐恵などは、解説しながらも、死さえ手なずけてしまふかのようなユーモアにいつも惹き込まれてしまう。

■二月十八日（日）

朝食の果物にマンゴスチンとマンゴーをいただく。特に、二つ割りに出されたマンゴスチンは、さらにいくつかに割れた白い果実が柔らかく甘い。ドリアンが「果物の王様」と呼ばれるのに対し、デリケートな食感のマンゴスチンは「果物の女王」と呼ばれるようだ。劣化しやすいので、なかなか日本では生食できない。それが毎朝デザートに出るとはこの上ない贅沢。朝早くから小ぶりのマンゴスチンを次々に器用に割っている船の調理場に思いを馳せた。

マンゴスチン割り継ぐ南海の俎上

俳句の講座は五回目。今日は擬人化についてお話しする。

投句作品に対する講評の後は、昨年百六歳で長逝された金原まさ子さんの作品を紹介した。文挾さんと対極をなすような破天荒な作風だが、こちらも文芸の世界にたつぷりと遊んでいる。作者は、現実への違和感から踏み込む悪徳的な世界からも瑞々しい詩想を得ているが、その奥には人間の本態を探るマニアックなほどの好奇心が浮かび上がる。へひな寿司の具に初蝶がまぜてあるへへエスカルゴ三匹食べて三匹嘔くへ墓またぐときごうごうと耳鳴りがへりんご食い古いオルガンのようにいるへ等々。イメージと感覚の特異な世界に遊ばせていただいた。

午後は、数日前に海神から通行許可証をいただいた赤道をまた戻る。戻るのは通行証なしで自由なのどうか。南緯から北緯へと赤道を渡り、船は少しづつ北上を始めた。風は結構強いが空は青く、海は紺碧なままだこまでも続く。

勇み足赤道越えたり戻ったり

夜のショーは、謙信&竹美。「謙信」は和太鼓の小泉謙一と津軽三味線の山中信人、竹美は民謡の柿崎竹美。各演奏者の地に根を下した力強い音楽に惹き込まれる。津軽三味線の超絶技巧も力強く洋上のホールに溶け込み見事としか言いようがない。竹美さんの愛嬌振りまく秋田民謡も久々に聞く、強く伸びのある声。

和太鼓にこぞる真夏の海の霊

赤道の夜の魂あらし津軽三味 赤道の神へと秋田おぼこの唄

九時過ぎからは、スコールが去ったのを見計らい、急遽「星の観察会」が催された。参加者は十階のデッキに集まる。船長自らサーチライトを持ち、いろいろな星や星座を神話を引きながら解説してくださる。東京の夜空とは異なり、無数の星がひしめき合う夜空から、すぐにお目当ての星が探せるところが、さすが船長。やはり老人星（カノープス）や南十字星などが見えると「赤道に近いなあ」と感激も一入。ちなみに船長は「かみのけ座」が一番好きだそうだ。

スコール去り老人星のすこやかに 船長のいちばん好きなかみのけ座

■二月十九日（月）

朝から快晴。朝食は久々に洋食にする。ビュッフェ形式なので、生野菜と果物を多めにとる。果物にはスターフルーツ、プラム、バナナ、パイナップルなど。断面が星型のスターフルーツは、あっさりした酸味があるくらいで味は淡白。野菜サラダに混じっていても違和感はなからう。

弾力ありスターフルーツの輪郭

今日は第六回目の講座。「直喩」についてお話しする。投句作品の講評の後は、神野紗希さんの句を紹介する。文挾夫佐

惠さん、金原まさ子さんからは七〇年ほどの年齢差があり、俳句の世界も表現の仕方もだいぶ異なる。それにしても（寂しいと言いつつ私を薦にせよ 神野紗希）は、与謝野晶子の（やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君）の向うを張るような現代の青春歌。

来たる二十三日の船内の文化祭には、各自短冊に自分の句を書いて展示することになっている。折角の機会なので、私も一枚したためることにした。最初は「ヘスコール脱ぐ老人星もすこやかな」という形であったが、擬人化を抑えることにして最終的には「ヘス

ール去り老人星のすこやかに」と相成った。時間的余裕があったので夜にも短冊をさらに数枚書いた。落款は持参しなかったので、赤の太ボールペンでの手描きデザイン。それぞれ世の中に一つしかない落款だ。



■二月二十日（火）

朝は曇天、小雨模様。午前中、七回目の講座。ふだんよりも一時間早い九時からの授業開始だったが、皆遅れずに出席してくださった。今日は俳句における暗喩の説明、受講客の投句作品の講評、そして佐藤文香の俳句と学生の俳句をすこし紹介した。受講者たちは、若い人の俳句にも温かいまなざしを注いでくださっている。週一コマ学生に俳句を教えている身としてはこの上なくうれしい時間であった。

十一時頃、レイテ島沖にさしかかり、デッキにて慰霊祭が厳かに執り行われた。船長がレイテ島沖海戦の激しさと悲劇についてお話になり、その後皆で黙禱。次いで、種々の花を誰彼となく海面へ投げて英霊たちに捧げた。私には直接のつながりはないが、高齢の方々に混じって一緒に黙禱していると自然に涙が湧いてきた。今大戦では、敵味方問わず大勢の健康な若い命が奪われた。時代の不幸とはいえ、この広い南方の海に投げ出されて夭逝した無数の兵士たちの無念さが偲ばれて仕方なかった。

英霊に触れよと花を南溟に

昼食後、船のラウンジで、フィリピンへの入国審査に先だって、審査官立合いの体温検査が行われた。廊下を歩いていくうちに透視されていたらしい。何も感じないまま出口に出てしまった。夜は、佐々木秀美さんの歌のショーを観る。

■二月二十一日（水）

朝、フィリピンのコロン港に接岸する。すっかり晴れ上がり日差しが強い。朝食にランブータンをいくつかいただく。ハリネズミの針が縮れたような外殻を守る内側の白い果肉が甘くて旨い。先日、ボロブドゥールでの昼食のとき、これを



皿一杯木村さんが持つてきてくださったが、よく見ると外殻いっぱいには無数の小さな蟻が固まっついていて驚いた。それほど甘味が濃いうことなのだろう。

朝食を済ませてデッキへ出ると、岸壁で地元のハイスクールの生徒たちが歓迎のマーチを演奏してくれていた。青と白の衣装が真夏の日差しに明るく映えて美しい。コロンの港からは四囲に無数の島影が見え、入江には多くの遊覧ボートや小型船が動いている。

朝涼し子らのマーチが港に待つ

さて、コロンタウンはマニラから南西に位置するカラミアン諸島で一番大きな町らしいが、中心街でも歩いて一時間くらい。こじんまりとした町で、人々の声や生活臭が身近に届き、親しみが湧く。この日は、シャトルワゴンに乗って街の



中心部まで出る。ここから、二百十メートルほどのタブヤス山を、数少ないツアー客に混じり、顔ヨガの篠原さんと登ることにした。

登り始めると、七百二十段の石段が頂上の十字架へと延々と続く。なかなかの運動量だが、上がるほどに街や海が美しく見渡せる。島々に囲まれた海は風いでいて、さしずめ瀬戸内海の小島という印象だ。頂上まで登り切ってみると、日差しは強いが、吹き渡っていく風は涼しい。途中、俳句教室の受講客の一人から、今朝ほど金子兜太先生が長逝されたそうだと聞く。この島のはるか東方にはトラック島があるはずだ。いまは南海の小島から、先生のご冥福を祈るのみ。洋上教室でも、兜太先生の句を紹介させていただいた。

赤道は魂帯び兜太を招く虹

山を下りてからは、フィリピン料理のレストランまでトライシクルという三輪タクシーで行く。昼食を取り、私はココナツの実に入ったココナツジュース（ムドジュース）を頼んだ。淡白な味だが、ココナツらしい清涼感がある。食事もある

くはなかったが、それにしても、鶏の首と一緒にスープに入っていた厚いゼラチン質の肉質のものは何だったのか。記憶



の片隅に眠っていた不思議な味わいだだったが、遂に思い出せなかった。帽子を忘れて店を出たのに気付いたのは次の教会見学の後。でも、このレストランでは、ビニールの袋に入れて忘れ物を保管しておいてくれた。

店は LOLO NOSTRAS RESTAURANT。旅では小さな一つの善意がその地への全的な好印象を形成する。コロンの町の人に感謝しながら旅を続けた。

ココナツ水飲んで帽子を置き忘る

その後、町の小さな教会を訪ねる。改修中だったが、キリストの受難像の彫刻が彫りの深い顔立ちで黒い肌の色であった。ブラックナザレのレプリカかも知れぬ、と後日指摘してくれた俳人がいた。その近くに小学校があり、半日授業なのかお祭なのか、子どもたちが次々と出てくる。校門の出口に何軒か出店が並び、子どもたちは早速おやつを買って食べている。その元気な風景に心安らぐ。

しかしながら、後日、コロンタウンの南にあるコロン島の



れているのだった。日本人への感情は多少複雑かも知れないと思う。

■二月二十二日（木）

今日はマニラ寄港の日なので、俳句教室はない。マニラ歴史地区一日バスツアーが空いていたので参加した。この時期、マニラは乾季で、日差しも強い。ツアーでは、特に旧市内と言われるイントラムロスを歩いた。サンチャゴ要塞、一六〇〇年頃建造のサンオーガスチン教会、スペイン統治時代の特権階級の暮らしが窺えるカーサマニラ、マニラ大聖堂。

そして、ソフィホテルで多国籍のビュッフェスタイルの昼食。その後、モール・オブ・アジアという大きなショッピングモ

湾には第二次世界大戦で、日本軍の艦船が十数隻撃沈され、いまでも海底に沈んでいるという事実を知った。穏やかとも見える島人の生活の裏に、日本軍の悲劇も隠



時代の史跡である城塞都市イントラムロスだ。特に、フィリ

ピン革命の英雄ホセ・リ

サル (Jose Rizal: 一

八六一〜一八九六) の記

念館が特に印象的だった。

フィリピンは、マゼラン

の到達後、スペイン人た

ちに次々と占領され、マ

ニラ陥落の一五七一年以

降三五〇年にわたってス

ペインによる統治時代が

続いた。そのときの独立

運動の先頭に立ったのが



ールで、買い物。私は、スーパーマーケットの方へ足を伸ばす。ちよとしたお土産などを見つける。帰り、リサル公園を車窓から見る。

この中で一番の見所は、スペイン統治

リサルだったが、捕えられ若くして銃殺されてしまう。その後、第二次世界大戦では、日本軍とアメリカ軍との戦闘で城塞内の施設はほとんど破壊されてしまったが、スペイン統治時代の面影がいまでも所々に見られる。さらに、サンチャゴ要塞の片隅には、日本軍の占領下に、多数のフィリピン人が地下牢に閉じ込められ満潮時に水死させられたという。その地下牢も残っている。

革命の悲史 火炎木の明るさに

マニラは、コレヒドール島の戦闘後に市街戦が展開された場所で、フィリピンの人の心境はさぞ複雑かと思われるが、地元のガイドさんは日本語でしっかりと案内してくださった。夜は中島弘幸さんのマジックショー。その後、マニラから乗ってきたエンタや講師たちと挨拶する。その中に世界で活躍中のジャズピアニスト山中千尋さんもいた。「私は俳句の講師です」と自己紹介したら、小澤實さんや川上弘美さんに会ったことがあり、俳句に関心があります、と笑顔が返ってきた。同行のお母さま共々、明日の俳句教室に来てくださること。大変うれしい出会いとなった。

■二月二十三日(金)

マニラを出港、いよいよ神戸、横浜に向けて最後の航海だ。一日中、波が少し高く、船もいつもより揺れるが私は大丈夫。

講師やエンタの中には酔い止めの注射を受けた人もいた。

朝七時から三十分ほど、篠原さんの顔ヨガ&ストレッチの教室に初出席。顔には小さい筋肉が三十以上あるそうだ。そのいろいろな顔の筋肉を動かすことによって、顔のたるみやほうれい線などを解消できるらしい。みんな手鏡を手に取り、いつせいに舌を出して「あっかんべー」をする。舌の付け根が微妙に意識される。この教室では、顔のみならず、体全体もゆっくりと解きほぐす。三十分ながら特に首のあたりがすつきりした。

顔ヨガの朝焼くづすあっかんべー

一方、私の俳句教室は残り三回。今日は俳句の象徴について話す。前日知り合ったジャズピアニストの山中さんもお母さまと共に見学に来てくださる。船がいつもより揺れるので、できるだけテキストを見なくて済むように配慮した。

夕食後は、その山中千尋さんのピアノコンサートを見る。音の一つ一つがクリアで強い光を放つ。心の中の風景がジャズの音になって生まれてくる。さすがに世界的な活躍をしている演奏者だと感動する。

音になり音を生みつぐ夜涼かな

演奏家の人たちとも食事を毎回共にしているが、食事のときの無防備というほどのざつくばらんな素顔と、舞台の時の集中しているときの表情がまったく違う。この落差にいつも

感心する。

■二月二十四日(土)

波はすこし収まったが、時折船は揺れる。今朝も顔ヨガ&ストレッチの教室に参加する。息を使いながらのストレッチは今後にも役立ちそうだ。顔がすつきりし、滑舌にも効果がある。早朝にもかかわらず体が活動のモードに入った気がする。

俳句の教室は、芭蕉から四Sまでの作家の代表句の鑑賞の第一回目。自分で解説をしていると、昔の俳句から思わぬものを発見することがある。楽しく九十分は過ぎた。

夕食後は、謙信&竹美の和太鼓・津軽三味線・民謡のトリオの演奏を楽しむ。相変わらずエネルギーな演奏に惹き込まれる。日本の音楽と言っても、現代性をふんだんに感じさせる曲想であり、演奏であった。今回いろいろと出会った若い人たちの瑞々しい演奏に希望を感じるのは私だけではない。

就寝前に時計を一時間進める。これで日本と同じ時間に戻った。

■二月二十五日(日)

沖縄沖を航行中。すこし涼しく感じる。少なくとも熱帯か

らは完全に脱け出している。朝、顔ヨガ&ストレッチの教室に参加し、その後、竹村さんの指導しているコーラスの発表会を見に行く。指揮者はいないが、ピアノの伴奏で皆のびのびと楽しそうに歌っていた。その後、アンコールに込めて、なんと竹村さんが「城ヶ島の雨」「セレナーデ」を独唱。艶あるバリトンの滔々とした歌声に皆うっとりする。合唱ははじめ、どの教室もそろそろ最終回に入ってきている。

アカペラのバリトンが締め夏の航 正美

今日は作業日で俳句教室はお休み。参加者の作品集を作る。



一人五句ずつ提出していただいた。人数は少ないが、それぞれの人生体験からくる物事の捉え方や感じ方が率直に出て、なかなか捨てがたい作品集になった。最後に表紙を付け、背の部分貼り、久々の手作り作品集となった。私自身、子供の頃から壁新聞や、学級新聞を作ったり、ゲームを工作したり、手で作ることが好きだった。そんなことを懐かしく思い出しながら、半日ほど、一冊一冊小さな作品集を生んだ。

■二月二十六日（月）

船は宮崎の沖を北上中。今朝にかけてすこし揺れたが、いまは穏やかで快晴。今日は最後の講座。私の好きな大正八・九年生まれの世代の作品を鑑賞し、最後に石原八束の生涯と作品を急行電車くらいで解説する。昨年、多摩地区現代俳句協会で九十分で講演した内容を三十分くらいに短縮したものだ。

夕食後は、クルーたちのショーで出し物も多彩。超多忙と思われる毎日の仕事の中から時間を割いて練習していらっしやるのには頭が下がるのみ。皆パワーに満ちていて、笑い満載の一夜が過ぎた。

■二月二十七日（火）

神戸港に着岸。思ったほどは寒くない。しばらくデッキに

出て神戸の海からの景色を堪能した。船のお客さんの半分以上がここで下船する。六甲山も目に入り、「秋」の同人だった白井眞貫・高橋宏子夫妻を偲んだ。昼食のテーブルはあちこち空いて少々寂しい。

荷物も出してしまったので、今日は午後から部屋にこもって、フランス語の音声テキストを聴き直してみる。

■二月二十八日（水）

横浜港に着岸。港に入ると鷗たちが次々と歓迎してくれた。横浜も晴。比較的穏やかだ。台風なみの嵐に追いかけてきたが、なんとか先に接岸できたようだ。デッキに出てみると、舳網を岸壁から次々と投げ入れてくる。一投も過たずはこちらの船に届く。一気に春に引き寄せられたようだ。私にとっての今年の春は、この港から始まる。港、それは帰還するものにとっては新たなことへの始点でもある。

エージェントの山岸さんが出迎えにきてくださったので、竹村さん、篠原さん、茶道の原先生と一緒に軽い昼食を取り、やがてそれぞれの帰路についた。

「秋」の東京句会が開かれている日だったが、間に合わないで副主宰の小笠原至さんに一報をして失礼することにした。

港から春は始まりかもめどり